音楽表現の共通性や固有性について考え
音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる
生徒の育成

――　日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽の比較鑑賞を取り入れた授業プランの作成と活用を通して　――

長期研修員　　町田　美紀

《研究の概要》

本研究は、中学校音楽科の鑑賞の学習指導において、日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽を比較鑑賞する活動を取り入れた授業プランを作成し、活用することで、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる生徒の育成を目指したものである。『気付く』『探る』『伝える』を比較鑑賞における学習のキーワードと設定し、各学習過程での指導例、生徒用の学習プリントや振り返りシート、教師用の参考資料などの授業プランを活用することは、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる生徒の育成に有効であることを、授業実践を通して明らかにした。

キーワード　【音楽－中　日本の伝統音楽　世界の諸民族の音楽　比較鑑賞授業プラン】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｇ０５－０４　令和３年度　２７６集

Ⅰ　主題設定の理由

平成28年12月に中央教育審議会から示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」において、音楽科の課題について、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められる」とされた。このことを踏まえ、平成29年改訂の学習指導要領では「Ｂ鑑賞」に、「生活や社会における音楽の意味や役割」「音楽表現の共通性や固有性」について考えることが事項として示された。

鑑賞の学習を充実させるためには、生徒が音楽表現の共通性や固有性について考えたことを基に、音楽に対し、自分なりに言葉で表したり、根拠をもって評価できるようにしたりすることが必要である。その際、様々な音楽の曲想と音楽を形づくっている要素との関わりから表現上の特徴を捉えたり、その特徴が生まれた文化的、歴史的な背景との関わりを探ったり、音楽の多様性を捉えることによって音楽文化の豊かさを感じ取ったりできるようにすることが大切であると考える。

音楽科の授業の中では、表現領域において歌唱の時間が充実されていたり、鑑賞領域において西洋音楽や我が国や郷土の伝統音楽を扱ったりする時間は確保されてきている。中学校学習指導要領解説音楽編では、我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性を理解できるようにすることを指導事項として、「第１学年は『我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽』を扱うこととしているが，第２学年及び第３学年は『我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽』へと対象を広げている」と示されている。しかし、世界の諸民族の音楽を扱う授業時間は、比較的少なくなっているのが現状である。我が国や郷土の伝統音楽は、その多くが、古くから中国や朝鮮半島など諸外国からの音楽文化の影響も受けながら独自の発展を遂げ、現在でも様々な音楽として存在している。諸外国の様々な音楽を知ることは、我が国や郷土の伝統音楽を理解するためにも必要な要素だと考える。

以上のことから、本研究では、日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽を比較鑑賞し、音楽表現の共通性や固有性などに着目して、それぞれの音楽に対する生徒の興味・関心を引き出しながら、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる生徒を育成したいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

中学校音楽科の鑑賞の学習指導において、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる生徒を育成するために、日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽を比較鑑賞する活動を取り入れた授業プランを作成し、活用することの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究仮説（研究の見通し）

中学校音楽科の鑑賞の学習指導において、日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽を比較鑑賞する以下の活動を取り入れた授業プランを作成し、活用することによって、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる生徒を育成できるであろう。

１　「つかむ」過程

日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽から同じジャンルや似ている編成の音楽を選択して比較鑑賞を行い、音や音楽に対する疑問点や不思議に気付かせたり、音楽から喚起されるイメージや感情に気付かせたりすることにより、音楽への興味・関心を高め、学習に対して見通しをもつことができるであろう。

２　「追求する」過程

音楽を形づくっている要素を手がかりに音楽の特徴や雰囲気を探り、知覚したことと感受したこととの関わりを考えながら意見交流を行ったり、音楽の背景となる文化や歴史に触れたりすることにより、音楽の特徴や多様性について理解することができるであろう。

３　「まとめる」過程

音楽を自分なりに評価し、伝え合う活動を通して、他者との関わりの中から自分の価値意識を再確認することにより、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　「音楽表現の共通性や固有性」とは

様々な音楽が、どのようにつくられているか、どのように演奏されているかについて、複数の音楽に共通して見られる表現上の特徴、あるいは、ある音楽だけに見られる表現上の特徴のことである。

(2)　「音楽のよさや美しさを味わって聴く」とは

曲想を感じ取りながら、音や音楽によって喚起された自己のイメージや感情を、音楽の構造や背景などと関わらせて捉え直し、その音楽の意味や価値などについて自分なりに評価しながら聴くことである。初発の感想のような表層的な捉えに留まることなく、鑑賞の活動を通して習得した知識を踏まえて聴き返し、その音楽の内容を価値あるものとして自らの感性によって確認する主体的な行為のことである。

(3)　「日本の伝統音楽」とは

日本の文化・歴史・伝統などの中で日本の人々によって生成、育成され国民の生活と共に発展してきた音楽のことである。一般に古典音楽と呼ばれている伝統音楽をはじめ、郷土に伝わる民謡、わらべ歌、子守歌、郷土芸能も伝統音楽として含まれる。

(4)　「世界の諸民族の音楽」とは

世界の様々な民族における、それぞれ独自の文化的特徴をもった音楽。自然環境や社会環境、歴史や宗教などとの関わりの中で維持されてきた音楽。

(5)　「比較鑑賞」とは

複数の音楽を比較しながら聴き、それぞれの音楽の特徴を対比的に目立たせて、聴き取ったり感じ取ったりすることである。共通点や相違点、あるいはその音楽だけに見られる固有性に着目し、音楽の多様性を捉えたり、曲や演奏に対する評価を伝え合ったりしながら、音楽のよさや美しさを味わう。

(6)　「比較鑑賞を取り入れた授業プラン」とは

音楽科の鑑賞領域において比較鑑賞を取り入れる意義は、複数の音楽を比較しながら聴くことにより音楽における共通性や固有性を捉え、個々の音楽だけでは気付けなかった音楽の特徴に気付きやすくなることである。また、その際に様々な音楽の曲想と音楽を形づくっている要素との関わりから表現上の特徴を捉えたり、その特徴が生まれた文化的・歴史的な背景との関わりを探ったり、音楽の多様性を捉えることによって音楽文化の豊かさを感じ取ったりできるようにしていきたいと考える。以上のことを踏まえながら「はばたく群馬の指導プランⅡ」に示された学習過程を基に、鑑賞領域の授業プランを学年ごとに作成する。

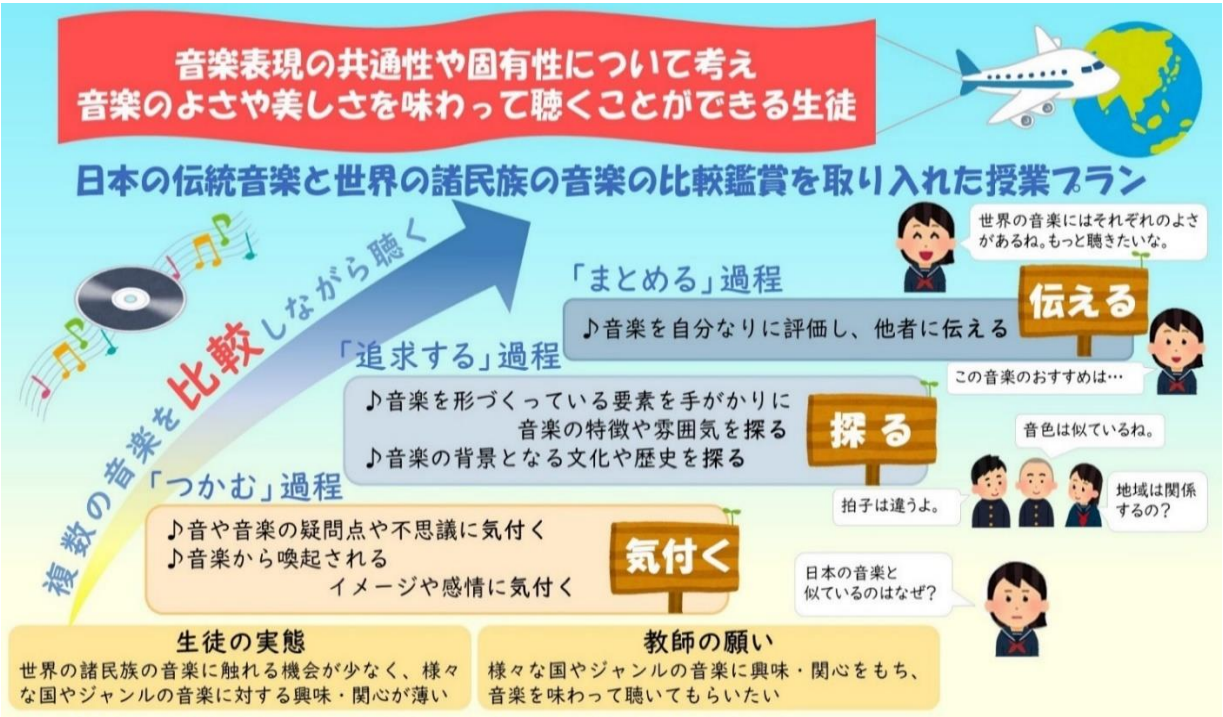
授業プランとは、鑑賞領域の学習において、比較鑑賞を取り扱う際の一連の流れを具体化したものである。比較鑑賞における学習のキーワードとして「つかむ」過程を『気付く』、「追求する」過程を『探る』、「まとめる」過程を『伝える』と設定し、各過程での指導例、生徒用の学習プリ

ントや振り返りシート、教師用の参考資料などの授業プランを作成していく。

各学習過程における指導のポイント及びワークシートなどについては、以下のとおりである。

学習過程	比較鑑賞のポイントとなる活動の流れ　学習のキーワード	◇生徒用ワークシート ・指導用参考資料
つかむ	○音や音楽の疑問点や不思議に気付く ○音楽から喚起されるイメージや感情に気付く	◇学習プリント ◇紹介文シート ◇振り返りシート ・比較鑑賞の題材構想、指導例 ・教材曲に関する参考資料
追求する	○音楽を形づくっている要素を手がかりに音楽の特徴や雰囲気を探る ○音楽の背景となる文化や歴史を探る	
まとめる	○音楽を自分なりに評価し、他者に伝える	

2　研究構想図



Ⅴ　研究の計画と方法

1　授業実践の概要

(1)　授業実践１

対　　象	研究協力校　中学校第1学年　230名
実 践 期 間	令和３年11月１日～11月16日
題　材　名	日本とアジアの語り物音楽を聴こう　〔全３時間計画〕
教　材　曲	義太夫節「新版歌祭文（しんぱんうたざいもん）」から“野崎村の段” パンソリ「興甫歌（フンポガ）」
題材の目標	義太夫節（日本）とパンソリ（韓国）の音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解するとともに、音楽表現の共通性や固有性について自分なりに考え、語り物音楽のよさや美しさを味わって聴き、我が国の伝統音楽やアジア地域の諸民族の音楽に親しむ態度を養う。

(2)　授業実践２

対　　象	研究協力校　中学校第２学年　210名
実 践 期 間	令和３年11月１日～11月22日
題　材　名	世界の様々な楽器の音楽を味わおう　〔全３時間計画〕
教　材　曲	日本「春の海」〈尺八、箏〉 インドネシア「チャトリ」〈スリン、カチャピ〉 ペルー「ウマウアケーニョ」〈ケーナ〉 イラン「キャラバン」〈サントゥール〉
題材の目標	日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽の音色、リズム、旋律の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解するとともに、音楽表現の共通性や固有性について考え、それぞれの音楽のよさや美しさを味わって聴き、世界の様々な音楽に対する興味・関心を広げ、音楽文化を大切にする態度を養う。

２　検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し１	「つかむ」過程において、日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽の比較鑑賞の際に、同じジャンルや似ている編成から音楽を選択し、音や音楽に対する疑問点や不思議に気付かせたり、音楽から喚起されるイメージや感情に気付かせたりしたことは、音楽への興味･関心を高め､学習に対して見通しをもつために有効であったか。	･授業中の観察 ･学習プリントの記述 ･紹介文シートの記述 ･振り返りシートの記述
見通し２	「追求する」過程において、音楽を形づくっている要素を手がかりに音楽の特徴や雰囲気を探り､知覚したことと感受したこととの関わりを考えながら意見の交流を行ったり､音楽の背景となる文化や歴史に触れたりしたことは､音楽の特徴や多様性について理解するために有効であったか。	
見通し３	「まとめる」過程において、音楽を自分なりに評価し、伝え合う活動を通して､他者との関わりの中から自分の価値意識を再確認することは、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くために有効であったか。	

３　指導と評価の計画（全３時間予定）

(1)　授業実践１

評価規準	知識・技能	知　「義太夫節」、「パンソリ」の音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解している。
	思考・判断・表現	思①　「義太夫節」、「パンソリ」の音色、リズムを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている。 思②　音楽表現の共通性や固有性について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。
	主体的に学習に取り組む態度	態　声による表現の多様さに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

過程	時程	○ねらい　めあて	評価の観点		
			知	思	態

つかむ	第1時	○「義太夫節」、「パンソリ」を聴き、それぞれの音楽の雰囲気を捉えることを通して、音楽の特徴について考えることができるようにする。 二つの国の音楽を比べながら聴いて、音楽の特徴に気付こう 【題材の課題】 日本と韓国の語り物音楽の特徴を探りながら聴き、音楽のよさや美しさを味わおう			
追求する	第2時	○「義太夫節」、「パンソリ」の音色、リズムを知覚し、感受したこととの関わりについて考えることを通して、二つの音楽の共通点や相違点に着目しながら音楽の特徴について理解できるようにする。 二つの国の音楽を比べながら聴いて、似ている部分や違う部分を探ろう	知〈観察・ワークシート〉	思①〈観察・ワークシート〉	
まとめる	第3時	○「義太夫節」、「パンソリ」のよさや美しさを自分なりの言葉でまとめて他者に伝える活動を通して、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。 二つの国の音楽の特徴を自分なりの言葉で表し、音楽のよさや美しさを味わおう 【課題を達成した姿】 音楽を形づくっている要素を手がかりに、日本と韓国の語り物音楽の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わっている		思②〈観察・ワークシート〉	態〈観察・ワークシート〉

(2)　**授業実践２**

評価規準	知識・技能	知　日本の伝統音楽や世界の諸民族の音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解している。
	思考・判断・表現	思①　日本の伝統音楽や世界の諸民族の音楽の音色、リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている。 思②　音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。
	主体的に学習に取り組む態度	態　日本の伝統音楽や世界の諸民族の音楽に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

過程	時程	○ねらい　めあて	評価の観点		
			知	思	態
つかむ	第1時	○「春の海」、「チャトリ」の楽器の音色や旋律を聴き取り、音楽の雰囲気を捉えることを通して、音楽の特徴について考えることができるようにする。 世界の楽器の音楽を比べながら聴いて、音楽の特徴に気付こう 【題材の課題】 世界の様々な楽器による音楽の特徴を捉え、音楽のよさや美しさを味わおう			

追求する	第２時	○「春の海」、「チャトリ」、「ウマウアケーニョ」、「キャラバン」の音色、リズム、旋律を知覚し、感受したこととの関わりについて考えながら、世界の楽器による音楽の共通点や相違点に着目して音楽の特徴について理解できるようにする。 世界の楽器の音楽を比べながら聴いて、似ている部分や違う部分を探ろう	知〈観察・ワークシート〉	思①〈観察・ワークシート〉	
まとめる	第３時	○「春の海」、「チャトリ」、「ウマウアケーニョ」、「キャラバン」のよさや美しさを批評する活動を通して、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽を味わって聴くことができるようにする。 世界の楽器の音楽の特徴を捉え、音楽のよさや美しさを味わおう		思②〈観察・ワークシート〉	態〈観察・ワークシート〉
		【課題を達成した姿】 世界の様々な楽器による音楽の共通性や固有性について考え、音楽の多様性を理解するとともに、音楽のよさや美しさを味わっている			

Ⅵ　研究の結果と考察

１　「つかむ」過程において、同じジャンルや似ている編成から音楽を選択して比較鑑賞を行い、音や音楽に対する疑問点や不思議に気付かせたり、音楽から喚起されるイメージや感情に気付かせたりしたことにより、音楽への興味・関心を高め、学習に対して見通しをもつことができたか

(1)　結果

①　第１学年

導入の場面では、どこの地域やどこの国の音楽なのかを想像しながら聴く活動を行い、生徒からは様々な国名が挙がった。その後に、日本と韓国の音楽であることを知らせ、次の活動に移った。

日本『義太夫節』と韓国『パンソリ』を聴取し、音楽の中で特徴的な部分や印象的な部分を聴き取る活動を行った。どこの国の音楽なのかを知り、その国の雰囲気を想像しながら聴くことで、音楽の細かな部分まで聴き取れるようになった。特に、音楽を形づくっている要素の『音色』について聴き取れた生徒が多く、声の音色や楽器の音色に関しての記述が多く見られた。声の音色に対して『義太夫節』は、言葉の最後の母音を延ばしながら抑揚をつける、日本の伝統的な歌唱表現（産み字）に気付くことができた生徒もいた。また、『パンソリ』の意見としても、「声を震わせて、揺らしながら音を延ばしている」や「音の最後にビブラートをかけている」などの特徴に気付く生徒も多くいた。また、楽器の音色から「弦をはじく」や「太鼓の縁を叩く」などの楽器の奏法に気付くことができた生徒もいた（図１）。

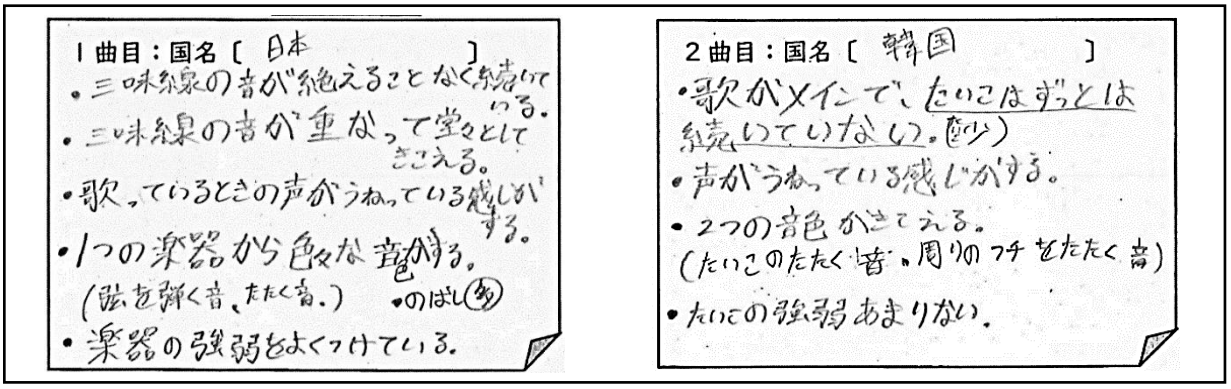


図１　特徴的な部分や印象的な部分を聴き取った生徒の記述内容

生徒の発言や感想からは、「国は違うけど、音楽の感じが似ていたのはどうしてなのか」や「同じ語り物音楽なのに、全く違う音楽になっていたのはどうしてなのだろう」などの意見があり、音や音楽の雰囲気を感じ取り、疑問を抱いたり、不思議に思ったりする生徒の姿が見られた。

本時の振り返りでは、「語り物音楽は聴いたことのないジャンルだから、新鮮で楽しかった」や「二つの曲を比べながら聴いて、特徴に気付くことができた」などの記述があり、音楽への興味・関心が高まった姿が見られた。次時に向けては、「語っている部分をもっと知りたい」や「歌の共通点を見付けていきたい」などの記述があり、学習に対しての見通しをもつことができた生徒が多くいた。

② 第２学年

日本『春の海』（尺八、箏）とインドネシア『チャトリ』（スリン、カチャピ）を聴取し、音楽から想像できる場面や音楽から喚起されるイメージに気付く活動を行った。

生徒の学習プリントの記述を見ると、１曲目の『春の海』から想像される場面や喚起されるイメージは、「お正月」「和風」「習字」「神社」などの、日本と関連する記述がほとんどであった。理由としては、「箏や尺八の音色」や「お正月に聴いたことがある」など、今までの生活経験の中で触れたことのある情報から気付くことができていた。また、「箏の音色」に関しては、第１学年の時に学習した『六段の調』の記憶から気付くことができた生徒が多く見られた。

２曲目の『チャトリ』から想像される場面や喚起されるイメージは、グラフのように、約６割の生徒が「沖縄」や「南国」「海」という記述であった（図２）。その理由としては、「カチャピの音色が波の音のように流れる感じだから」や「速度が速くて一定な部分が海の様子を表現しているみたいだったから」などの『音色』や『速度』に関するものと、「沖縄で流れている感じの音楽だと思った」や「明るい雰囲気が南国の海や海岸で演奏しているみたいだった」などの『旋律』に関するものであった（図３）。

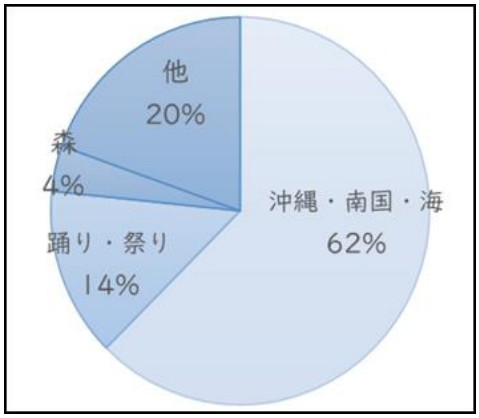
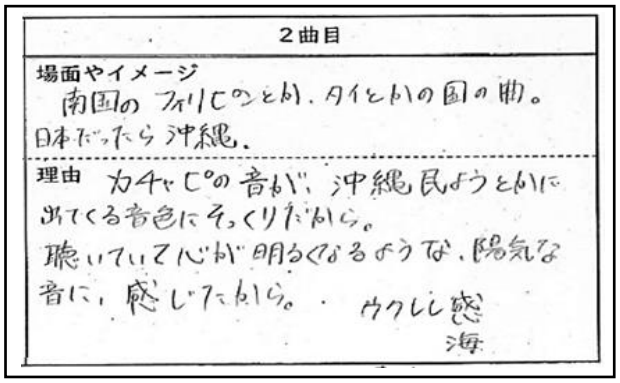


図２『チャトリ』を聴いたイメージ

本時の振り返りでは、「日本と世界の音楽は違うと思っていたけど、なぜ似ているのかと思った」や「２曲目は日本ではないのに、なぜ日本っぽい感じがするのか気になった」など、音楽に対して疑問に思う記述があった。次時に向けては、「なぜインドネシアの曲が日本と似ているのかを知りたいと思う」のように疑問を解決したいという意欲や、「他のいろいろな国の似たような楽器の曲を見付けてみたい」のような楽器の音楽に対する興味・関心について記述することができた生徒が多くいた。


２曲目

場面やイメージ
南国のフィリピンとか、タイとかの国の曲。
日本だったら沖縄。

理由 カチャピの音が、沖縄民ようとかに出てくる音色にそっくりだから。
聴いていて心が明るくなるような、陽気な音に、感じたから。 ウクレレ感
海

図３　想像される場面やイメージの記述内容

(2)　考察

「つかむ」過程での生徒の記述や発言から考察すると、「語り物音楽」や「弦楽器と管楽器の演奏」のような共通点のある音楽を選択して比較鑑賞を行うことで、「同じような音なのに、何か違う」や「２曲とも日本の曲なのかな」など『音色』に着目して、音楽に対しての疑問点や不思議に気付かせることができた。このことが、音楽的な特徴を探ることへの原動力となり、学習に対して見通しをもつことにつながったと考える。

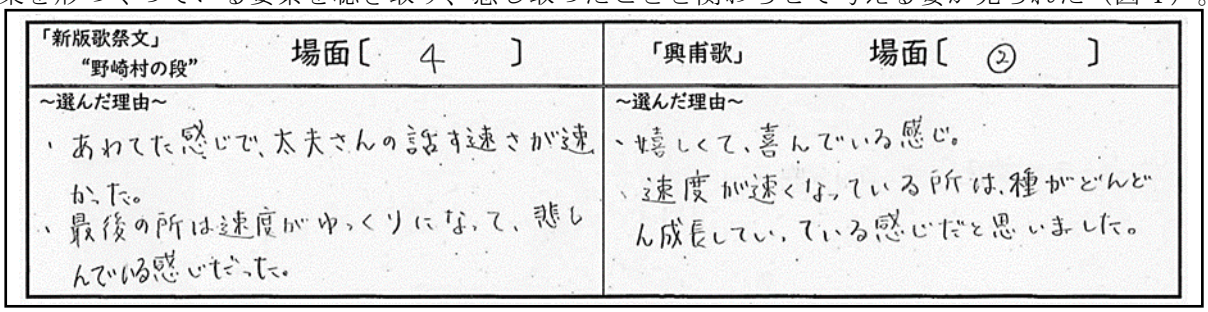
以上のことから、同じジャンルや似ている編成の音楽を選択して比較鑑賞を行い、音や音楽に対する疑問点や不思議に気付かせたり、音楽から喚起されるイメージや感情に気付かせたりしたことが、音楽への興味・関心を高め、学習に対して見通しをもつ上で有効であった。

２　「追求する」過程において、音楽を形づくっている要素を手がかりに音楽の特徴や雰囲気を探って意見交流を行ったり、歴史や文化に触れたりすることにより、音楽の特徴や多様性について理解することができたか

(1)　結果

①　第１学年

物語と音楽との関わりを知覚・感受する活動では、物語のあらすじを４コマ漫画にしたものを示し、物語の場面をどのような音楽で表現しているか聴取した。生徒の記述では、場面の音楽から音楽を形づくっている要素を聴き取り、感じ取ったことと関わらせて考える姿が見られた（図４）。

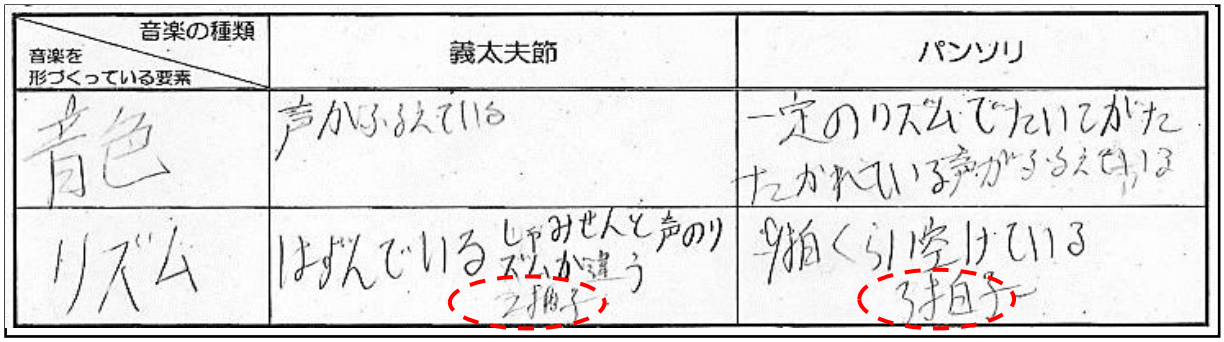


「新版歌祭文」“野崎村の段”　場面［ 4 ］	「興甫歌」　場面［ ② ］
～選んだ理由～ ・あわてた感じで、太夫さんの話す速さが速かった。 ・最後の所は速度がゆっくりになって、悲しんでいる感じだった。	～選んだ理由～ ・嬉しくて、喜んでいる感じ。 ・速度が速くなっている所は、種がどんどん成長していっている感じだと思いました。

図４　物語の音楽表現を聴き取ったり感じ取ったりした記述内容

音楽を形づくっている要素を手がかりに音楽の特徴を探る活動を行った際には、要素を『音色』と『リズム』に着目して音楽の特徴をまとめた。生徒の『音色』に関しての記述からは、「三味線の音色や響き」「太鼓の音色や響き」の楽器の音色に関するものと、「声の質」や「歌における音の延ばし方」の歌声の音色に関する記述が見られた。

生徒の学習の様子を観察していると、『音色』の記述欄にはスムーズに記述する姿が多く見られた。『リズム』に関しての記述では、「弾むようなリズム」などのリズムパターンに関するものがあった。しかし、拍子の違いを聴き取ることが難しい様子の生徒が多く、記述している様子を観察していても、空欄のままの生徒が多くいた。そこで、生徒が拍子を体感できるように、音楽に合わせて手拍子をする時間を設けた。その結果、２拍子系のリズムと３拍子（３分割）系のリズムを聴き取ることができた生徒も増え、音楽の特徴を書き加える生徒もいた（図５）。

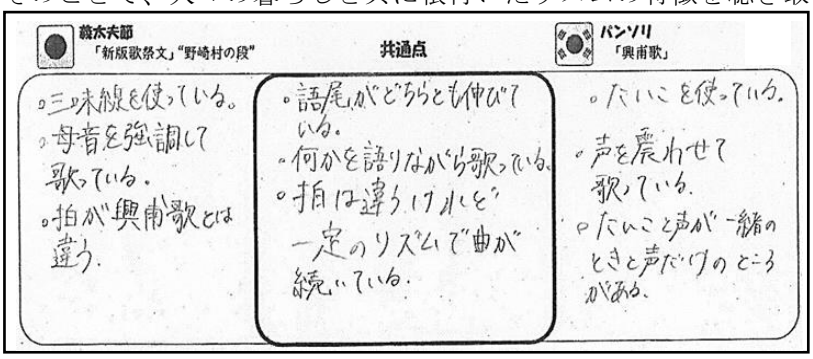


音楽の種類 ＼ 音楽を形づくっている要素	義太夫節	パンソリ
音色	声がふるえている	一定のリズムでたいてがたたかれている声がふるえている
リズム	はずんでいる しゃみせんと声のリズムが違う 2拍子	9拍くらい空けている 3拍子

図５　音楽の特徴を探った記述内容

また、拍子の特徴を捉える際には、世界地図を掲示し、文化や歴史を踏まえながら２拍子系と３拍子系のリズムの説明を行った。そのことで、人々の暮らしと共に根付いたリズムの特徴を聴き取ることができ、音楽と地域や歴史との関わりを意識し、様々な視点から音楽を捉えることができた。

共通点と相違点をまとめる活動では、今までの学習プリントを参考にし、周囲の生徒と相談しながら音楽を比較する姿が見られた。共通点に関しての記述



義太夫節「新版歌祭文」“野崎村の段”	共通点	パンソリ「興甫歌」
・三味線を使っている。 ・母音を強調して歌っている。 ・拍が興甫歌とは違う。	・語尾がどちらとも伸びている。 ・何かを語りながら歌っている。 ・拍は違うけれど一定のリズムで曲が続いている。	・たいこを使っている。 ・声を震わせて歌っている。 ・たいこと声が一緒のときと声だけのところがある。

図６　「義太夫節」と「パンソリ」を比較した記述内容

では、「語り物音楽」や「演奏形態」に対する記述をしている生徒が多く見られた。相違点に関しては、「楽器の音色」「発声方法」「拍子」「速度」に対しての記述が多く、音楽を形づくっている要素を手がかりにして思考することができていた。また、相違点に関しては、日本の伝統的な歌唱表現（産み字）に触れながら、音の延ばし方に関して『義太夫節』と『パンソリ』を比較できた生徒の姿もあった（前ページ図６）。

振り返りの記述からは、語り物音楽において、場面ごとの音楽表現の特徴を、音楽を形づくっている要素を手がかりに捉えることができた記述が多くあった。また、それぞれの国や地域の音楽文化や音楽の歴史と関わらせて、音楽の特徴を理解している姿も見ることができた（図７）。

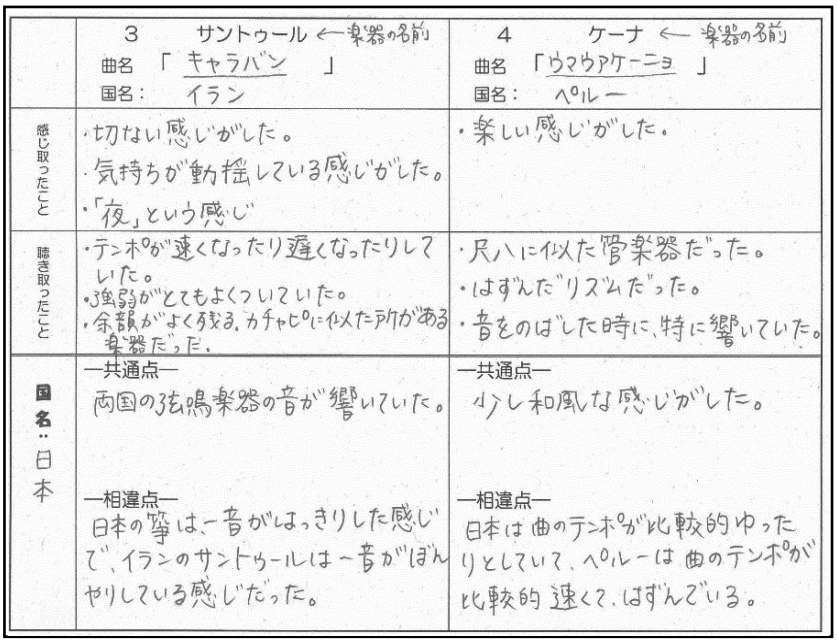
♪今日の授業を振り返って…
○場面によって曲想が違っていて興味深かった
○悲しい部分は速度や強弱が関係していると思った
○近い国でも２拍子や３拍子などの音楽の伝わり方が違うのがおもしろいと思った
○それぞれの国の曲によって、音色・リズム・強弱などが違うことを知った
○近い国でも音楽の歴史に違いがあると分かった
○生活の違いが音楽にも影響することが分かった

図７　本時の振り返りの記述内容

②　第２学年

前時の振り返りのために『春の海』と『チャトリ』の冒頭部分を聴取した後、イラン『キャラバン』とペルー『ウマウアケーニョ』の冒頭部分を聴取し、どこの地域（国）の音楽なのかを発表してもらった。生徒の発言からは、２曲共に「インド」「日本」「中国」などのアジア州の国名を挙げる生徒が多かった。『キャラバン』に関しては、西アジアの雰囲気を感じ取った様子で、正解が「イラン」と聴いても生徒の驚きは少なかった。しかし、『ウマウアケーニョ』に関しては、日本や日本に近い東アジアの国と考えた生徒が多く、正解が南米の『ペルー』と聞いて、驚きや疑問をもつ生徒が多くいた。

その後、再度『キャラバン』と『ウマウアケーニョ』の聴取を行い、感じ取ったことや聴き取ったことなど、音楽の特徴をまとめる活動を行った。また、聴き取ったことを記述する際には、音楽を形づくっている要素を手がかりにし、具体的に書くよう伝え、図８のようにまとめた。



	３　サントゥール ←楽器の名前 曲名「キャラバン」 国名：イラン	４　ケーナ ←楽器の名前 曲名「ウマウアケーニョ」 国名：ペルー
感じ取ったこと	・切ない感じがした。 ・気持ちが動揺している感じがした。 ・「夜」という感じ	・楽しい感じがした。
聴き取ったこと	・テンポが速くなったり遅くなったりしていた。 ・強弱がとてもよくついていた。 ・余韻がよく残る。カチャピに似た所がある楽器だった。	・尺八に似た管楽器だった。 ・はずんだリズムだった。 ・音をのばした時に、特に響いていた。
国名：日本	―共通点― 両国の弦鳴楽器の音が響いていた。 ―相違点― 日本の箏は一音がはっきりした感じで、イランのサントゥールは一音がぼんやりしている感じだった。	―共通点― 少し和風な感じがした。 ―相違点― 日本は曲のテンポが比較的ゆったりとしていて、ペルーは曲のテンポが比較的速くて、はずんでいる。

図８　聴き取ったことと感じ取ったことを比較しながらまとめた記述内容

イラン『キャラバン』に関する生徒の記述からは、「インドネシアのカチャピの音と似ていた」や「ピアノを演奏している音と似ている」などの『音色』そのものに対する記述が多くあった。また、音の余韻に対して「音が延びていた」や「音が揺れながら延びて響いていた」など、自身が知覚したことから、「不思議な感じがする」や「夜のような、不気味な感じがした」などと、感受したことを記述する生徒も見られた。ペルー『ウマウアケーニョ』に関しては、『キャラバン』と同様に『音色』に関する記述が多く、「笛みたいな音がした」や「尺八と似ている音色だった」などの記述があった。また、『リズム』に関する記述も多くあり、「弾んでいるリズム」や「スタッカートで音が短かった」などと聴き取れたことから、「踊り」や「祭り」と想像した生徒もいた。

『キャラバン』と『ウマウアケーニョ』の２曲を比較鑑賞した記述を見ると、『音色』や『リズ

ム』に関しては、音楽を形づくっている要素として捉えやすく、知覚したことと感受したこととの関わりを考えるときにも手がかりにしている生徒は多かった。また、感じ取ったことの中で「日本の音楽みたい」や「和風」と感じた理由については、音楽を形づくっている要素の『旋律』と関わらせて、５音音階などを取り上げながら確認した。

次に、前時に聴取した『春の海』『チャトリ』から１曲を選び、本時に聴取した２曲と比較してまとめる活動を行った。そこでは様々な思いや考えを知るために、少人数での意見交流の場を設定した（図９）。交流の様子を観察すると、「カチャピとサントゥールみたいに、弦の素材が同じだと音も似ているね」のように、『音色』に着目して音楽の特徴を捉えている姿が見られた。また、「尺八とスリンとケーナは同じ竹製だけど、つながりがあるのかな」のように、楽器の歴史について触れている様子も見られた。

図９　意見交流の様子

生徒の振り返りに「友達の意見を聞いて、違う考えを知れてよかった。ペルーのウマウアケーニョは、ケーナという笛を使っていた曲で、日本からすごく離れた国でも、日本の和の感じがして不思議だなと思った。もっといろいろな世界の音楽を知りたい」のような記述が多く見られた。意見の交流を行い、様々な考えを知ることで、音楽の特徴や音楽の多様性についての理解につながっている様子が見られた。

(2)　考察

「追求する」過程においては、前時で気付いた音楽に対しての疑問点や不思議に思ったことを解決するために、音楽を形づくっている要素を手がかりに、音楽の特徴や雰囲気を探ることが活動の中心となる。その活動を充実したものにするために、他者との意見交流を行ったことで、様々な視点からの意見や多様な考えを知ることは有効であった。活動の様子を観察していても、音楽を形づくっている要素に着目して、友達に質問したり、意見に共感したりする姿が見られた。また、『リズム』の特徴を捉える際には、聴覚からの情報だけでは分からなかったことも、音楽で使われているリズムを生徒が体感することで、拍子を捉えるきっかけとなっていた。その際にも、単に『リズム』を体感するだけではなく、文化や歴史との関わりに触れることで、その国や地域特有の音楽表現を知ることとなり、音楽を通しての国や地域のつながりを意識することができた。

以上のことから、音楽を形づくっている要素を手がかりに音楽の特徴や雰囲気を探って意見交流を行ったり、歴史や文化に触れたりすることは、音楽の特徴や多様性について理解するために有効であった。

３　「まとめる」過程において、音楽を自分なりに評価し、他者と伝え合うことにより、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができたか

(1)　結果

①　第１学年

日本『義太夫節』と韓国『パンソリ』から紹介したい曲を選び、紹介文を書く活動を行った。紹介文を書く際には、伝える相手を明確に示すことで、「他者に伝えたい」という思いを促すことができると考え、今回は紹介する相手を生徒の家族と設定した。

「つかむ」過程と「追求する」過程の学習を基に、「音楽に対する自分なりの評価」、「評価の根拠」、「音楽の特徴や音楽表現の共通性や固有性」の項目に分けて紹介文を書けるように学習プリントを工夫した。生徒の紹介文の記述内容を分析してみると、『義太夫節』に関しては、「聴きなじみがあった」「三味線の音色が落ち着く」「親しみやすい」などの理由が挙げられており、日本文化に対して価値を見いだしている生徒が多かった。また、『パンソリ』に関しては、「初めて

聴いた」「太鼓の音色や力強い歌声」「弾んでいるリズム」などの理由が挙げられており、今までに触れたことのない音楽文化への興味・関心の高まりを感じることができた生徒が多くいた（図10）。

紹介文としては、記述する内容を明示したことにより、多くの生徒が「自分なりの評価とその根拠」や「音楽の特徴」など記述することができていた。内容に関しては、今までの学習プリントを参考にして、『音色』『リズム』などの音楽を形づくっている要素を手がかりにしながら、知覚したことと感受したこととの関わりを意識して、自分なりの言葉で表すことができていた。また、設定した項目以外で紹介したいことを記入できるようにした自由記述欄に関しては、約８割の生徒が「映像で演奏の様子を見た感想」や「日本や韓国の音楽文化について」や「他の語り物音楽への興味・関心」など、様々な思いや考えを記述することができていた。

私の紹介したい曲は、韓国のパンソリです。

なぜならば、初めて聴いたとき、日本の伝統音楽とは大きく異なり、強く印象に残ったからです。また、とてもびっくりしたので、この驚きをもっとたくさんの人と共有したいと思ったからです。

この曲の音楽の特徴は、太鼓を使い、三拍子で音を取っているところです。曲を演奏するために使われている楽器は太鼓のみで、その他は全て人の声で演奏されています。歌声にビブラートがかかっているところ、音をのばすところとそうでないところのメリハリがしっかりとしているところが主な特徴です。

あまり聴きなじみのない韓国語と、聴きなじみのある太鼓の音の二つが合わさっているのが面白いところです。所々セリフも出てくるので、そこも聴いて欲しいポイントです。

皆さんもぜひ聴いてみてください。

図 10　紹介文の記述内容（第１学年）

その後、紹介文をグループで伝え合う活動を行った（図11）。

自分なりの言葉で書き表すだけでなく、他者に伝えることで自分の価値意識を再確認することができ、学習の深まりにつながると考える。伝え合う際には、「疑問に思ったことや確認したいことがあれば、発表者に質問してみましょう」と伝えたところ、生徒たちは「義太夫節のどのようなところがよいと思ったの」や「パンソリの声で好きだと思ったところは、どのようなところですか」などの質問や、「紹介文が分かりやすかったです」などの称賛の言葉を友達に伝える姿も見ることができた。振り返りシートの記述からも、他者と伝え合う活動に対しては、「他の人の意見を聞くと分かりやすくなった」や「音楽のよさを相手に伝えると、自分も相手もそのよさを見付けることができる」などの記述がされていた。

図 11　紹介文を伝え合う活動の様子

②　第２学年

学習した音楽の中から紹介したい２曲を選び、今までの学習の中で捉えた「音楽の特徴」や「共通点・相違点」を「発見した音楽のヒミツ」として、音楽のよさや魅力などを伝える形式の紹介文シートを設定した。紹介文の場合は、伝える相手を明確に示し、伝えたい内容や言葉の選び方に工夫が見られるように、今回は担任の先生に宛てた紹介文とした。

生徒の紹介文シートの記述では、音楽を形づくっている要素の『音色』『リズム』に関する内容が多くあった。『音色』に関しては、楽器（弦）の素材による音の違いや演奏方法による音の違いを挙げている生徒が多くいた（図12）。『リズム』に関しては、ペルーの『ウマウアケーニョ』につ

私は、日本の『春の海』とイランの『キャラバン』のヒミツを発見しました。

それは何かというと…

日本の『春の海』に使われている弦楽器の「箏」は、爪で弦をはじきますが、イランの『キャラバン』に使われている弦楽器の「サントゥール」は、弦をたたいて音を出します。けれど、たたくということは打楽器かと思ってしまうので、2曲の弦楽器をまとめて「弦鳴楽器」と言います。同じ弦楽器でも、演奏の仕方が違うと一音一音に違いも生まれてきます。日本の『春の海』は、引き締まった場面で使われていそうな感じがして、イランの『キャラバン』は、恋人が別れてしまった時の切ない場面で使われていそうな感じがします。

2曲の中でも、私のイチ押しポイントは…

同じ弦鳴楽器でも、日本の箏は音がはっきりした感じで、イランのサントゥールは音がぼんやりしている感じだというところです。あと、2曲とも音が響いてきれいなところです。

ぜひ聴いてみてください。

図 12　紹介文の記述内容（第２学年）

いて記述している生徒が多く、「跳ねるリズムがお祭りみたいだった」や「リズムの繰り返しが踊っている感じだった」と聴き取ったことと感じ取ったことを関わらせながら考えることができていた。さらに、「速度の変化はなく一定の速度で演奏されていた」など、時間経過の中での速度の変化の様子を捉えている生徒がいた。また、紹介文を書く際に、多くの生徒が日本の『春の海』を取り入れて紹介文を書いている姿があった。『日本』を選択した生徒の記述内容では、「聴きなじみのある音楽だから落ち着く感じがする」や「お正月に流れていて日本の雰囲気を感じるから」などが見られた。

(2)　考察

「まとめる」過程においては、書く内容を明示した紹介文の形式にしたことで、書くことに対して苦手意識をもっている生徒も、音楽に対する価値などを、自分なりの言葉で記述することができていた。紹介文に関しては、生徒の実態を把握した上で紹介文の形式を考えることで、意欲的に取り組むことができたと考える。また、紹介文を他者と伝え合うことで、自分では気付けなかった音楽の特徴に気付くことができ、音楽に対して新たな見方ができるようになったと考える。その後に再鑑賞を行うことで、音楽を通して自分の価値意識や他者の考えを再確認することができた。この音楽を繰り返し聴く機会の蓄積が、生徒一人一人の音楽に対する価値意識をさらに広げることにつながった。

複数の曲を聴き比べることで、それぞれの音楽の特徴に気付き、共通点や相違点を捉えやすくなり、音楽の多様性を理解するためには比較鑑賞を行うことが有効であったと、振り返りの記述からも読み取ることができる（図13）。

―生徒の振り返りの記述（第１学年）―

♩ 今までの学習を振り返ってまとめをし、これからの授業や生活の中で生かしていきたいことは…

この3回の授業をふくめて、他の国の音楽の良さが知れました。
日本の音楽と聞き比べると、それぞれの良さがあり
違うところもありそれが良さをひきめしているのだと思いました。

―生徒の振り返りの記述（第２学年）―

♩ 今までの学習を振り返ってまとめをし、これからの授業や生活の中で生かしていきたいことは…

日本の音楽から、アジアやペルーの方までの音楽を聞いて、似ている所や全然違う所などがあり、世界の音楽にとても興味がわきました。楽器の音も見た目が似ていても違う音色のような感じになっているところがおもしろいなと思いました。そして、自分の思ったことだけではなく友達の意見や感じ方などを言い合ってみると、色々な感じ方があることがわかりました。このことを音楽以外にも活かしたいです。

図 13　題材のまとめの振り返りシートの記述

以上のことから、音楽を自分なりに評価し、他者と伝え合うことは、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くために有効であった。

Ⅶ　研究のまとめ

1　成果

○　「つかむ」過程において、日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽の中から、同じジャンルや似ている編成の音楽を選択し比較鑑賞することで、生徒は音や音楽に対して疑問を抱いたり、不思議に思ったりすることができた。また、似ている部分の音楽を抜き出し、その部分を比較鑑賞することで、音楽から喚起されるイメージや感情の違いの原因や理由は何かを考えるきっかけにもなった。生徒の中での様々な気付きが音楽への興味・関心を高め、学習に対して見通しをもって取り組むことができた。

○　「追求する」過程において、音楽を形づくっている要素を手がかりにして比較鑑賞を行い、音楽の特徴や雰囲気を探ったことは、生徒が思考・判断する際のよりどころとなり、共通点や相違点を捉えやすくなった。また、知覚・感受したことを基に意見交流を行ったことで、多様な考えに触れ、音楽を様々な視点で捉えることができた。さらに、音楽を手拍子などで体感したり、音楽の背景となる文化や歴史に触れたりすることで、音楽の特徴を捉えやすくなり、音楽表現の多様性への理解へとつながった。

○　「まとめる」過程において、生徒の実態に合わせた紹介文の形式にすることで、自分なりの言葉で評価することができた。また、紹介文を伝え合う活動を通して、自分の価値意識の再確認や音楽に対する新たな発見をすることができた。様々な思いや考えを知ることで、音楽への理解が深まったと言える。また、日本の伝統音楽と世界の諸民族の音楽を比較鑑賞することで、自国の音楽のよさや美しさを再認識し、世界の様々な音楽に興味をもつきっかけになり、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができた。

２　課題

○　複数の音楽を比較鑑賞する際の聴取する曲順は、生徒の知覚・感受に大きく影響を与えると考える。生徒に対して、どのような疑問点や不思議に気付かせたりするか、教師側が様々な生徒の反応を想定して、授業の流れを組み立てる必要があると考える。

○　比較鑑賞では、複数の曲を聴取するため、必然的に１曲にかける時間は短くなってしまう。充実した学習活動にするためには、聴取する曲や聴取する場面を精選し、繰り返し聴く時間を確保することが求められる。

Ⅷ　提言

世界の諸民族の音楽を知ることは、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を深めるためにも必要な要素だと考える。様々な異なる環境の中で育まれ発展してきた音楽は、それぞれ異なった価値観を有している。生徒が様々な音楽文化に触れることで、音楽の多様性を感じ取り、音楽に対する価値観や視野を広げられるような鑑賞の学習の充実が求められる。

＜参考文献＞

・文部科学省　『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編』
・群馬県教育委員会　『はばたく群馬の指導プランⅡ』(2019)
・国立教育政策研究所　教育課程研究センター　『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校　音楽】』　東洋館出版社（2020）
・藤井　知昭　水野　信男　山口　修　櫻井　哲男　塚田　健一　編　『民族音楽概論』　東京書籍（1992）
・下中　弘　編　『音楽大事典』　平凡社（1983）
・藤井　知昭　監修　『音と映像による世界民族音楽大系　レーザーディスク版解説書』　日本ビクター（1995）
・島崎　篤子　加藤　富美子　著　『授業のための日本の音楽・世界の音楽』　音楽之友社（1999）
・峯岸　創　監修・著　『日本の伝統文化を生かした音楽の指導』　暁教育図書（2002）
・大熊　信彦　酒井　美恵子　著　『中学校音楽新３観点の学習評価完全ガイドブック』　明治図書（2021）
・加藤　徹也　山﨑　正彦　著　『中学校新学習指導要領音楽の授業づくり』　明治図書（2018）

＜担当指導主事＞

福島　純子　　豊岡　大画